

「情報」思いつくまま

米花 稔*

専門領域を異にする研究者が、同じ問題について討議する機会、いや討議しなければならない機会がきわめて多くなったことは、お互い最近の共通の経験であろう。企業経営の立地とかその地域環境の問題をとりあげてきた筆者も、必然的に、地域開発問題全般に、好むと好まざるにかかわらずとりくまないわけにいかず、そのおかげで、専門を異にする社会科学、自然科学にわたるいろいろの分野の研究者に接する機会がすくなく、研究意欲を触発せられて、有難いことだと思っている。そのような機会に、研究分野の異なるに従って、ものの考え方、用語など、お互いにずい分ちがっていることに、とまどったり、考えさせられたり、笑いあったりすることしばしばである。

たとえば、地域実態を計量経済学的手法によって、専門研究者が分析するについて、社会現象の多様性なるゆえに、討議の過程で、試行錯誤的に結論の修正をおこなうのに対して、つねに明確な結論をよりどころにする自然科学畑の研究者が納得できない不信を表明したり、経済機能と、地域施設との関連を「流通」という用語で話合っているうちに、同じ用語について交通工学の畑の人、理論経済学畑の人、マーケティングの畑の人などによって、それぞれかなりちがった内容を思っていることがわかってきたりする。このごろはやりの地域についての「中枢管理機能」という用語にいたっては、各分野の研究者共通に、なんとなくその意味しているものを承知しつつ、さてその具体的内容の吟味となると、きわめて多様で、今日まだ必ずしも統一的に明確な内容をもっているものということができない。

このような考え方なり、用語についてのくいちがいは、ひとり専門領域を異にするものの間だけのことではない。同じ専門領域において、世代を異にすることによって、その間のくいちがいもまた小さいものではない。たとえば、地域問題で土地利用計画ということがある会合で議論になったことがある。これは都市計画に関する専門分野における新進の研究者と、一世代をおいた大先輩の間でのことであるが、前者は計量経済学的手法などを導入しつつ土地利用を論じるのに対し、後者は

* べいか みのる 神戸大学経済経営研究所教授

あくまで土地利用は、具体的な施設計画についてのあり方を地図上に明示することを主とするものであるとして、はげしく論じられたことがあった。

このように、空間的に領域を異にするなかにおいて、また時間的に世代をこえて、考え方なり用語などを中心多くのくいちがいの問題をもちつつ、しかも共通の問題に、相互協力して研究接近することが要請せられているのが、今日の研究者の主要な課題の一つであろう。まさしくここに情報の問題があると思うのである。

さて情報というと、一方には先年来ドキュメンテーションとか、インフォメーション・レトリバルなど文献センター的な側面からの情報への関心が高まっているとともに、他方には一昨年来産業界においてとりわけいわゆるマネジメント・インフォメーション・システムへの関心が強く、また国の新全国総合開発計画のなかで、これからの情報化社会というみ方がうちだされ、殊にアポロ11号月着陸からひとしきり情報を中心とするシステムズ・アプローチ論がにぎやかになるなど、いまや情報をめぐって花ざかりという感を深くする。このような情報への関心のたかまりは、いうまでもなくコンピューターの加速度的発展とこれに照応する通信技術の発展という技術的手段の急速な展開にもとづくものであることは、いまさらいう必要のないところである。コンピューターとそのネットワークを中心とするハードウェアとソフトウェアのはなばなしい発展が、情報をめぐる議論の花ざかりをささえているといえそうである。わが国の場合、とりわけその感を深くする。

このことは、情報化社会の到来、企業におけるMISへの関心のたかまりから、さて具体的なプロジェクトとして、なんらかの情報処理産業の育成とか情報センター構想をうち出そうとするときに、そのつかみどころがはっきりとしないのにとまどうことしばしばであるというのも、昨今のいつわりのない事実である。情報処理のハードウェアとソフトウェアの発展をよりどころに、情報センター構想を具体化しようとする、議論に花のさくわりに内容的前進があるところでもたってしまうというような会合の経験をしばしばもつ。いわゆるユーザーの情報需要の内容と必要度がはっきりつかめないのである。

もちろん特定分野、たとえば科学技術情報とか海外産業情報などについては、現に情報提供のサービス向上が、コンピューターを手段として、漸次進められていることは事実である。日常の生活においても、国鉄の緑の窓口とか銀行の普通預金の窓口で、情報時代の恩恵に多少は浴しつつある。しかしよりレベルの高い、きめのこまかい情報サービスとなると、ユーザーの側からもサービス提供者の側からも多くのむづかしい問題に当面しているのが現在の段階といえそうである。

研究者という情報の利用者の立場から、このことを自分の身近な例でみてみよう。自分の専門の畑についての資料の所在は、誰でも同様に見当がつきやすいし、また文献サービスの専門の方の協力も得やすいが、一番こまるのは畑ちがいの分野のことが知りたい場合である。しかもはじめにもふれたように、畑ちがいの分野の知識なり資料の必要なことがきわめて多くなったのが、このごろの特徴である。この点、大学というところはありがたいもので、各分野の専門家がいます。このことなら、あの学部のあの人にきけば見当がつくだろうと、電話のダイヤルをまわしてみよう。突然のことで相手にはご迷惑だが、やはり餅屋は餅屋、たちどころに明快な示唆が得られる。時たまであるが、このような勝手をして教えられ、有難いことだと感謝し、新しい知識を得てうれしくなる。情報センターということがしばしばきかれる今日、考えてみると、いまのような利用者の便利さを、制度と技術によって組織的につくりあげることではなからうかと思われるのである。ある特定分野の情報の組織的蓄積の機能と、これにかかわるもろもろの他の関連分野の情報についてのスイッチング・センターの機能とを、あわせもつことであるように思う。もっとも、特定分野の情報の蓄積と他の分野の情報源に対するスイッチ機能といっても、その分担関係が明確にきめていくむづかしさがある。現にこのことは情報サービスをコンピューター中心に手がけているところで、苦心している点の一つのようである。

しかしながら、このような具体的な問題に苦心している段階にあるものは、情報機能へのとりくみの相当前進しているところである。情報サービスをめざす多くの試みでは、まだそれ以前の段階、情報需要自体を十分につかみ得ないというところまで検討をかさねているようにみうけられるのである。

ここまできて、情報需要ということであらためて考えてみたいのである。コンピューター時代のもたらした考え方、インフォメーションなり情報というつかみ方は、情報量の急速な増大と、領域をこえる情報交錯の多様性に特徴づけられる現在、きわめて適切なものといってよいであろう。しかしまた情報という用語にふりまわされすぎず、情報需要にさきだつ問題意識という点に考え及ぶ必要がありそうである。研究者であれ、産業界であれ、あるいは生活面に関する場合であれ、問題意識の強度が、必然的に情報需要を引きおこすはずであり、それに対応する情報提供技術は、既に相当進んでいるはずである。しかもその問題意識は、さきにふれたように、今日研究者の場合も、産業界の場合も、自分の境界領域をこえた多様性、複雑性をめぐるものであり、関係者の考え方なり用語自体が多様なのが現状である。ここらあたりから、情報需要の内容を検討する必要があるようである。

このごろアメリカの情報産業の例として、数千人を擁するコンサルタント企業ないしソフトウェア企業の実態が紹介せられる。そこには、自然科学の各分野から社会科学の各分野にわたる専門技術者をもって、パッケージ・サービスないしシステム・サービスが行なわれている。このような企業の発展の原動力の大きな部分が、宇宙開発にもとづくことも、ポスト・アポロ時代の一つの問題として、紹介せられているところである。しかしながら、このような当面の課題としての原動力、あるいはコンピューターの発展という原動力以前にさかのぼっても、パッケージ・サービスの、あるいは総合サービスの情報業務は、コンサルティング業務として相当盛んであったことを知っておく必要がある。つまり、特定の問題について、専門領域をこえて、パッケージ・サービスをするような、情報産業、知識産業、あるいはコンサルティング業務が開発せられていたということである。今日やかましいタテワリ、ヨコワリの境界をこえるいわゆるシステムズ・アプローチの前提条件が、このようにつくられつつあったのでなかろうかということを思うのである。

十分な脈絡なしに、情報ということをめぐることについて、思い浮ぶまま書きならべてみた。いまここでは体系的な結論を展開する場ではないようである。これらの諸点をよりどころに、さらに情報問題について、折をみて考えてみたい。

経済資料研究 No. 3 予告

研 究

統計分類の比較照合について

前 田 昇 三

特殊文献目録編集に関する問題点

——ヒルファディング文献目録編集に関して——

細 川 元 雄

研究余滴

経済書誌つれづれぐさ

天 野 敬太郎

レファレンス・ボックス

近代日本経済関係 2 次文献(3)——貿易——

経済資料協議会関東部会

1970 年 3 月 発行 予定